はじめに

ネパールはヒマーラヤ山脈の南斜面に位置している。その斜面に爪を立てるようにしてコシ，ナラヤニ，カルナリといった大河の支流が流れ落ち，山の土をそいで南に下る水は下流のインド北東部に毎年のように襲いかかる。飛行機の窓から見おろす洪水の様は，幾つもの頭を持つ竜が踊り狂っているのだとしか思われない。ネパールの中央部カトマンドゥ盆地は，かの竜の一つの頭だろうか。あるいは，竜が口にくわえると伝えられる玉であろうか。

カトマンドゥ，その南に隣接するパタン，そして20キロメートルほど東のバドガオン，この三つの都市を包み込むようにしてカトマンドゥ盆地（ネパール盆地）がある。この盆地は5，6世紀頃からネパールの文化の中心的舞台となってきた。カトマンドゥ盆地の住民であるネワール人たちは，大乗仏教を取り入れ，今日に至るまでインドより直接伝えられた大乗仏教の形態を残している。

カトマンドゥ盆地にインドの大乗仏教に極めて近い形態が残っていることは意外と知られていない。チベット仏教も確かにインドより直接に伝えられたものではあるが，今日のチベット仏教の形態，特に儀礼や図像はチベットで独自に発展した要素を多分に含んでいる。チベット本土で仏教復興の兆しがみられるが，チベット仏教はおそらく二度とかつてのような形態を取り戻すことはできないであろう。

ネワール仏教の未来は決して明るいものではない。仏教の伝統的学問の訓練を受けた人々が次々と他界し，後継者はなかなか育たない。ネワールの仏教，つまりインド大乗仏教の伝統を残すネパールの仏教に関して記録に残したり，その伝統を学ぶことのできる時期は今以外にないのである。

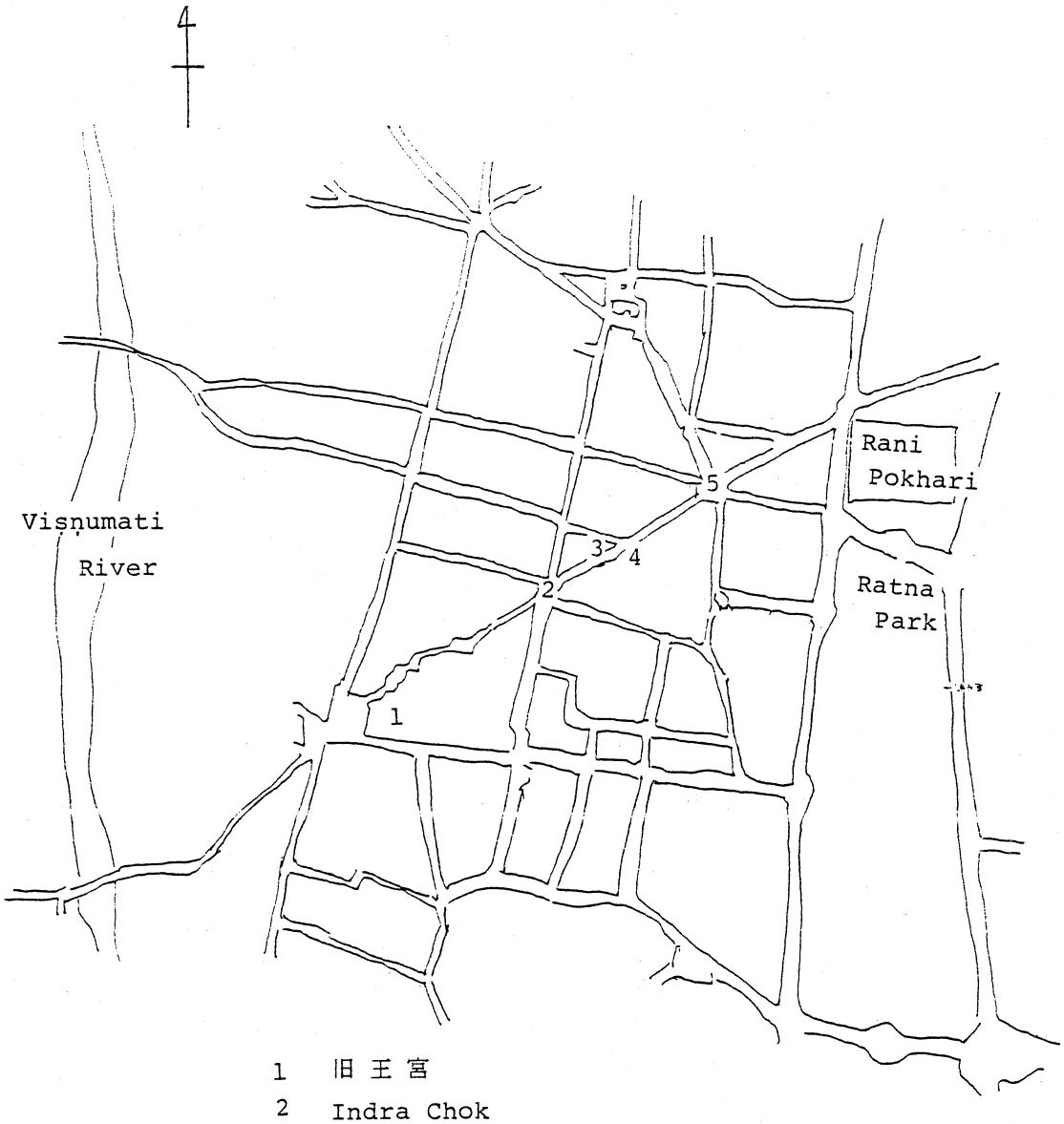
このような状況の中で，本四国第四十四番菅生山大宝寺名古屋別院大黒山宝大寺建立会会長滝一浄氏のご援助により，ネワール仏教に関する第一回の調査を行なうことができた。ここに感謝の誠を捧げたいと思います。調査対象としてはチュシュヤー・バハ，クワー・バハ等のカトマンドゥの諸々の仏教寺院を選んだが，この報告書は，それらの仏教寺院の中でも最も有名なジャナ・バハに関するものである。調査は1987年7月22日から8月18日までの期間に行なわれた。調査隊の構成は下記のとおりである。

隊長：	名古屋大学助教授	立川　武蔵
隊員：	名古屋大学助手	和田　壽弘
	名古屋大学大学院生	森　雅秀
	同上	佐藤　喜子
	同上	佐久間留理子
	名古屋大学卒業生	安藤　嘉美

この報告書にみられるような民族学的方法はこれまでの印度哲学の文献学的方法とは異なるということもあり，われわれの調査がまだ表面的なものであることは残念ながら事実である。が，これによりネパールに生きている「インドの大乗仏教」の姿が少しでも伝えられたならば，われわれの望外の喜びである。

１９８８年５月

立 川 武 蔵



1　旧王宮
2　Indra Chok
3　Jana Baha
4　Kel Tole
5　Asan Tole

図1　カトマンドゥ市街図

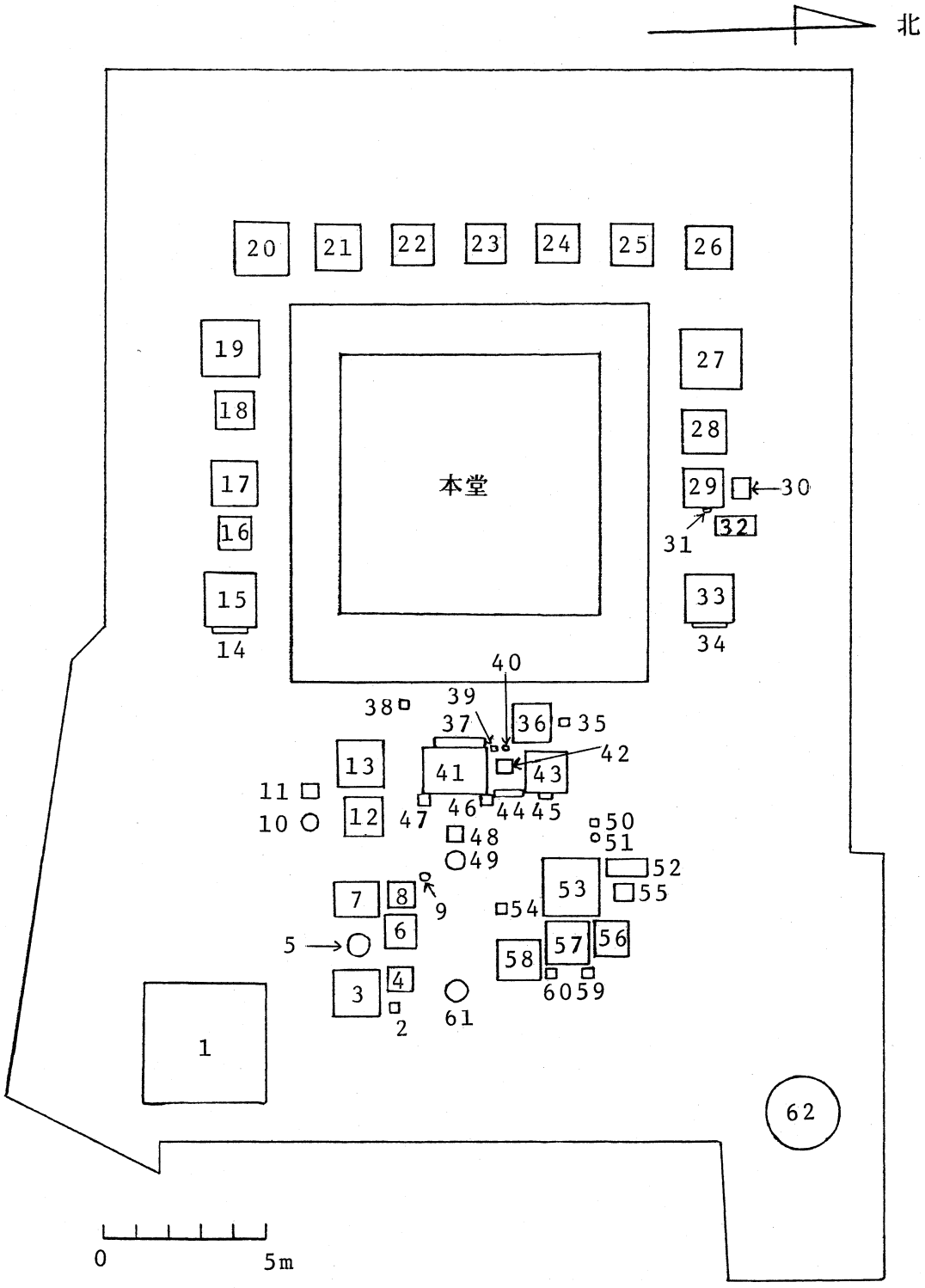


図2　ジャナ・バハ中庭図